

地域をデザインする

2015.5.11 東京都税制調査会

東京大学都市工学科・地域デザイン研究室

特任教授・窪田亜矢

地域とは何か？

地理学者、水津一郎1982『地域の構造 - 行動空間の表層と深層』大明堂

「空間的諸関係」を内在する「空間的なもの」とは、地理学にとってなんであろうか？→「空間」「地域」「景観」の受け止め方は非常に混乱していることを率直に述べたうえで、

(空間を) 古来、日本語では「ま」「ところ」「場所」「土地」などおよび、それらの具体的なあらわれを「しま」「むら」「さと」「ぢかた(地方)」「まち」「くに」などとしてとらえてきた。これらの言葉の意味するものは、たんなる自然でも、またたんなる人文でもない。それは、自然と人文とがひとつにおりなされた「すみか」として、人間存在にとって根源的なものである。

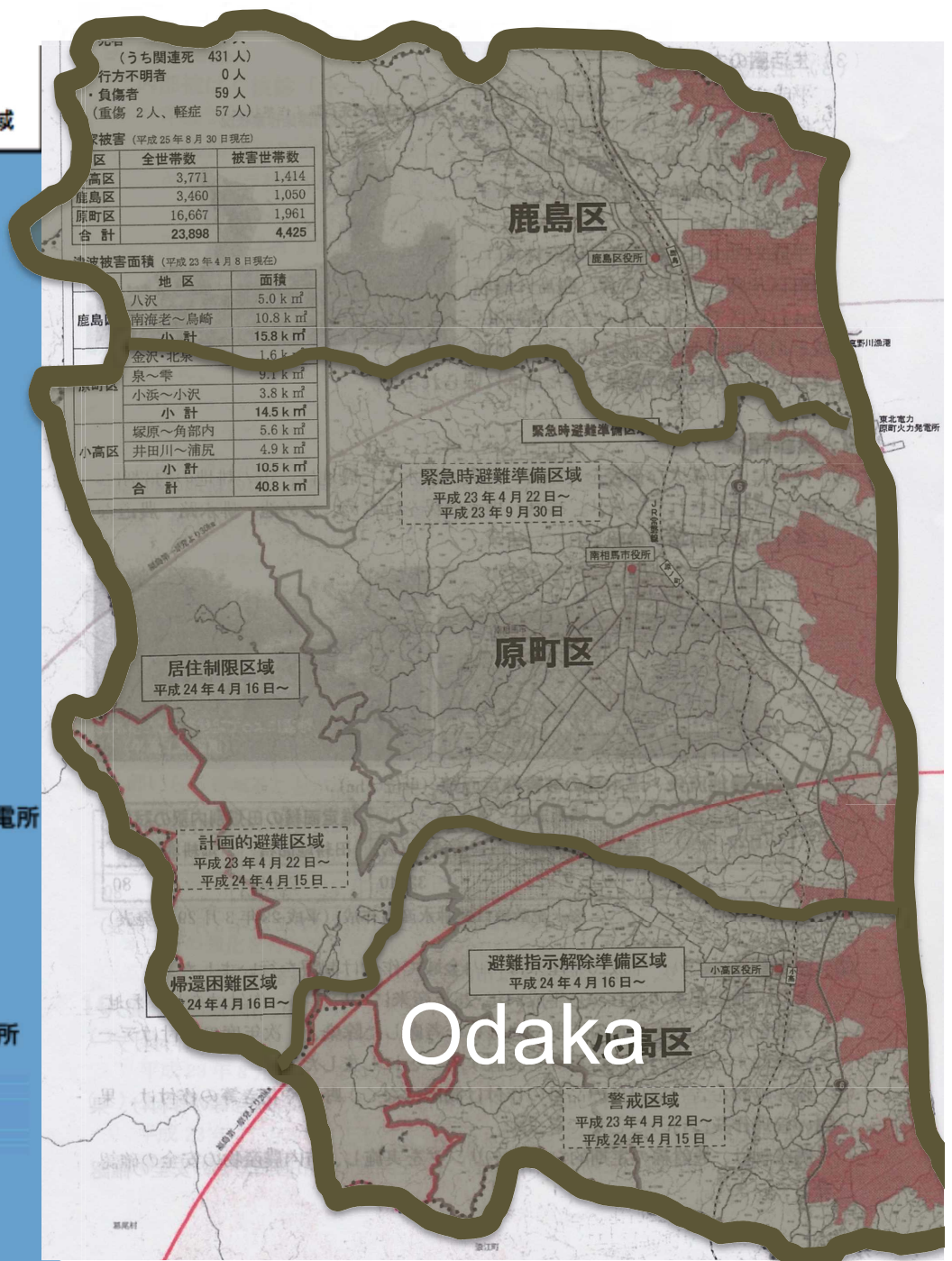
地域デザインとは何か？

- 地域 = 暮らしをなんらかの形で支える領域
- 地域デザイン = 暮らしを支える空間と制度のデザイン
 - 敷地から街区、地区、地域、、、多様なスケール
 - 地域の内部には、暮らしの担い手となる共同体の意思に重きをおく community design の側面が重要。
 - 同時に、地域の内外の関係をデザインする social な側面も重要。

「暮らし」の特質とは何か？

- 共同体による：生業に役立つもの＋集合的記憶
- 安定が志向される：結果としての持続
- 「資源」を豊かに創出し、分配する
- 「リスク」を減じるよう備えて、分担する

南相馬市における小高の位置付け



(うち関連死 431人)
行方不明者 0人
・負傷者 59人
(重傷 2人、軽症 57人)

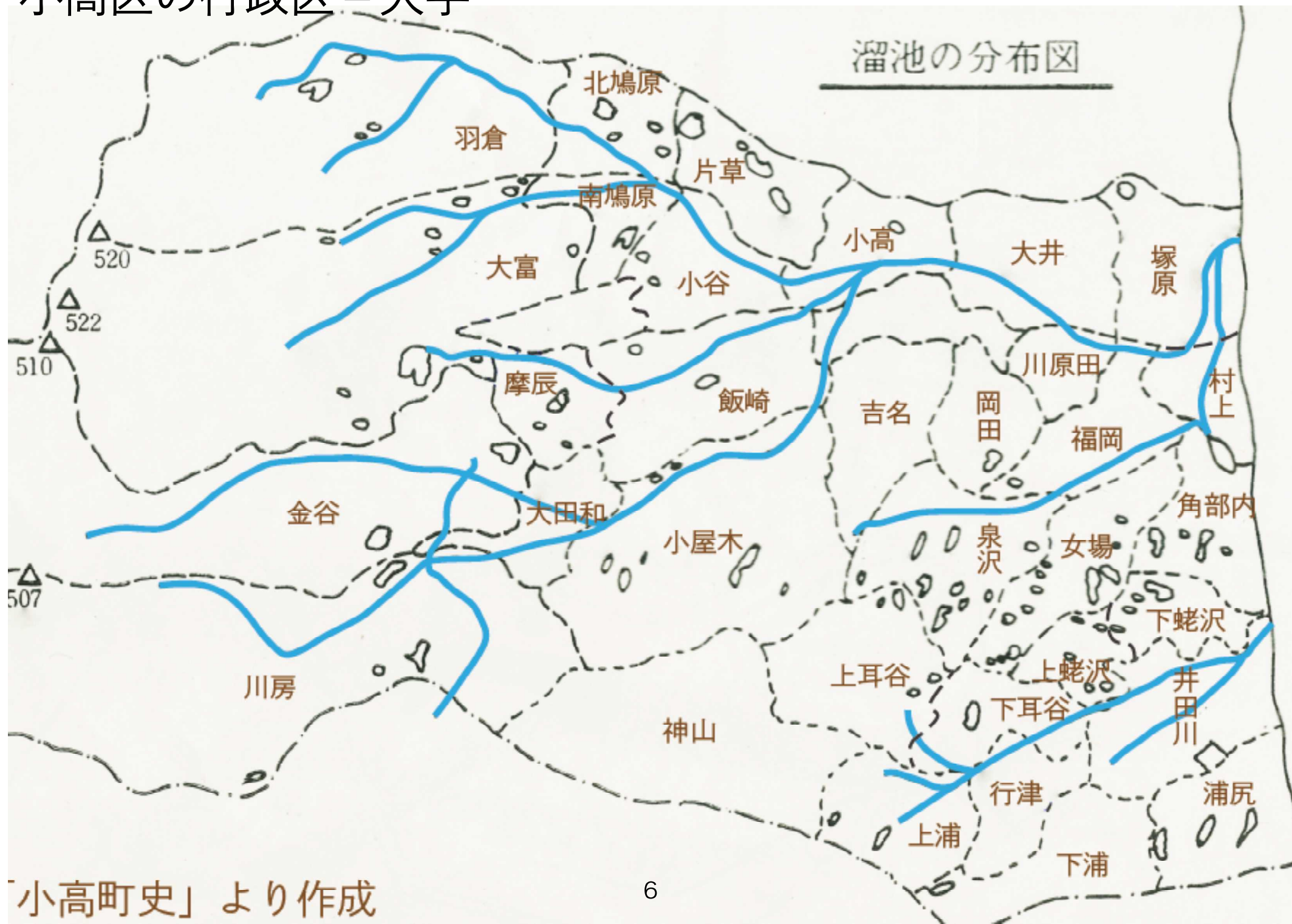
被災者 (平成25年8月30日現在)

区	全世帯数	被害世帯数
小高区	3,771	1,414
鹿島区	3,460	1,050
原町区	16,667	1,961
合計	23,898	4,425

被災被害面積 (平成23年4月8日現在)

地区	面積
八沢	5.0 k㎡
鹿島区 南海老～鳥崎	10.8 k㎡
小計	15.8 k㎡
金沢・北条	1.6 k㎡
泉～拳	9.1 k㎡
小浜～小沢	3.8 k㎡
小計	14.5 k㎡
塚原～角部内	5.6 k㎡
小高区 井田川～浦尻	4.9 k㎡
小計	10.5 k㎡
合計	40.8 k㎡

小高区の行政区 = 大字



小高まちなか

震災前の聞き書き記憶の地図



【凡例】
 ■■■■：名前のある通り
 ●：特徴のある通り

- ：これまでのインタビューで名前が挙げたもの
- ：機業所…以前小高で盛んだった特徴的な生業の場。
- ：元下駄屋…聞き取り調査から特に多く判明した。
- ：特徴的のある歴史的建造物…文化財を専門に扱う方の見所として挙げている例。

7
 この辺りは
 大南長球になることになった



□震災前のまちなか

- ・ 教育施設や病院の集積で、店舗形成可能
- ・ 郵便局や銀行支店等の公益施設群
- ・ 葬儀社を頂点として関連する店舗群
- ・ 床屋さんのような溜まり場を提供する店舗

- ・ 「年金生活者になって、店主として戻る」

□被災後のまちなか

- ・ 「待っている人がいるから、再開する」
- ・ 床屋さんが現地で再開
- ・ 魚屋さんは復興商店街で再開
- ・ 復興祭、という形で、一時的な賑わいの再生

□海沿い集落

津波による壊滅的な被害、災害危険区域指定。

漁港整備と漁業再開の目途が立たず。

漁業を再開したい人がいる。

集落に戻らなくても関係が続けたい人がいる。

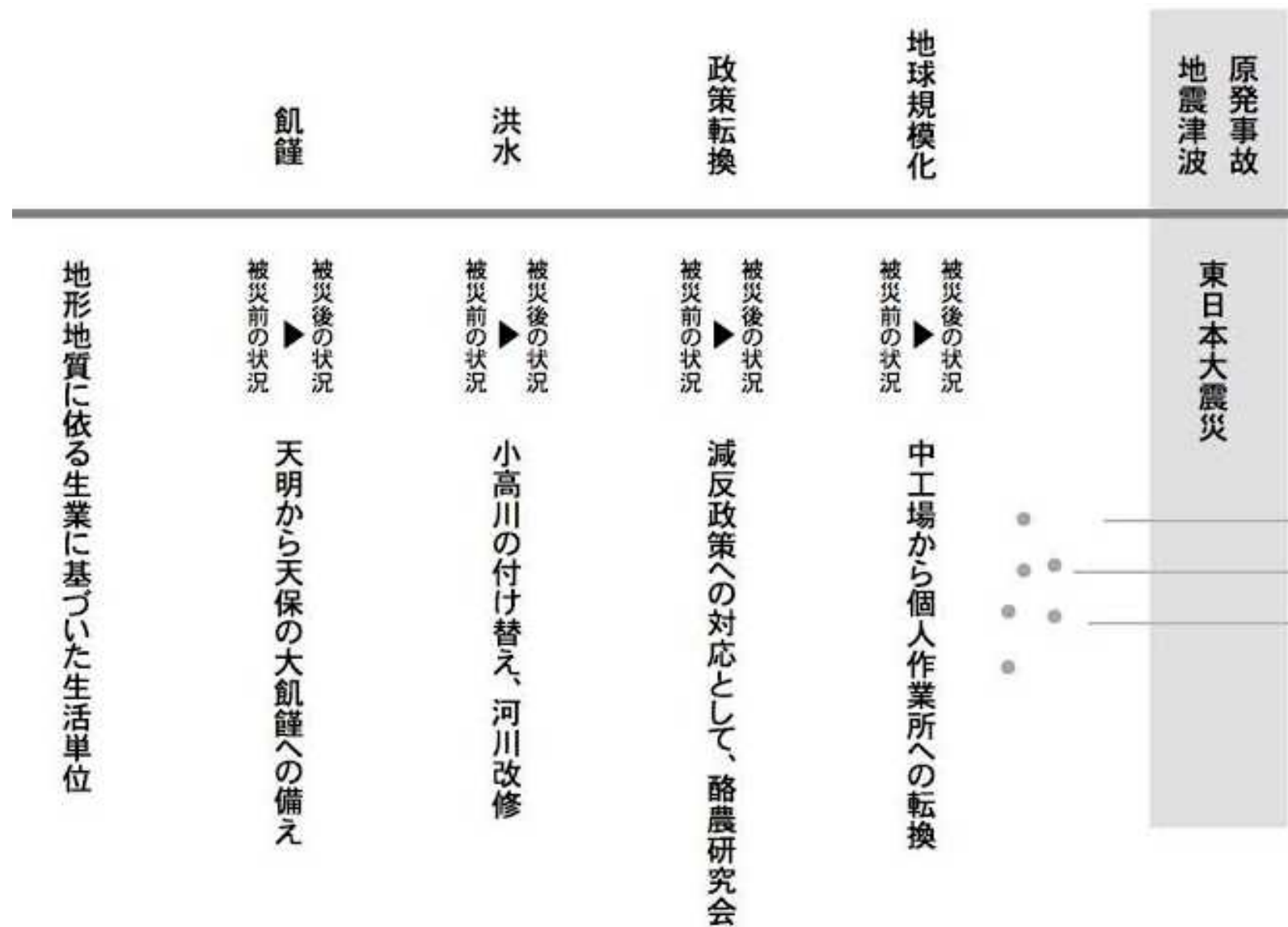
□山沿い集落：汚染濃度高め

有名な酪農研究会、40～60歳代の少数精鋭がいた。

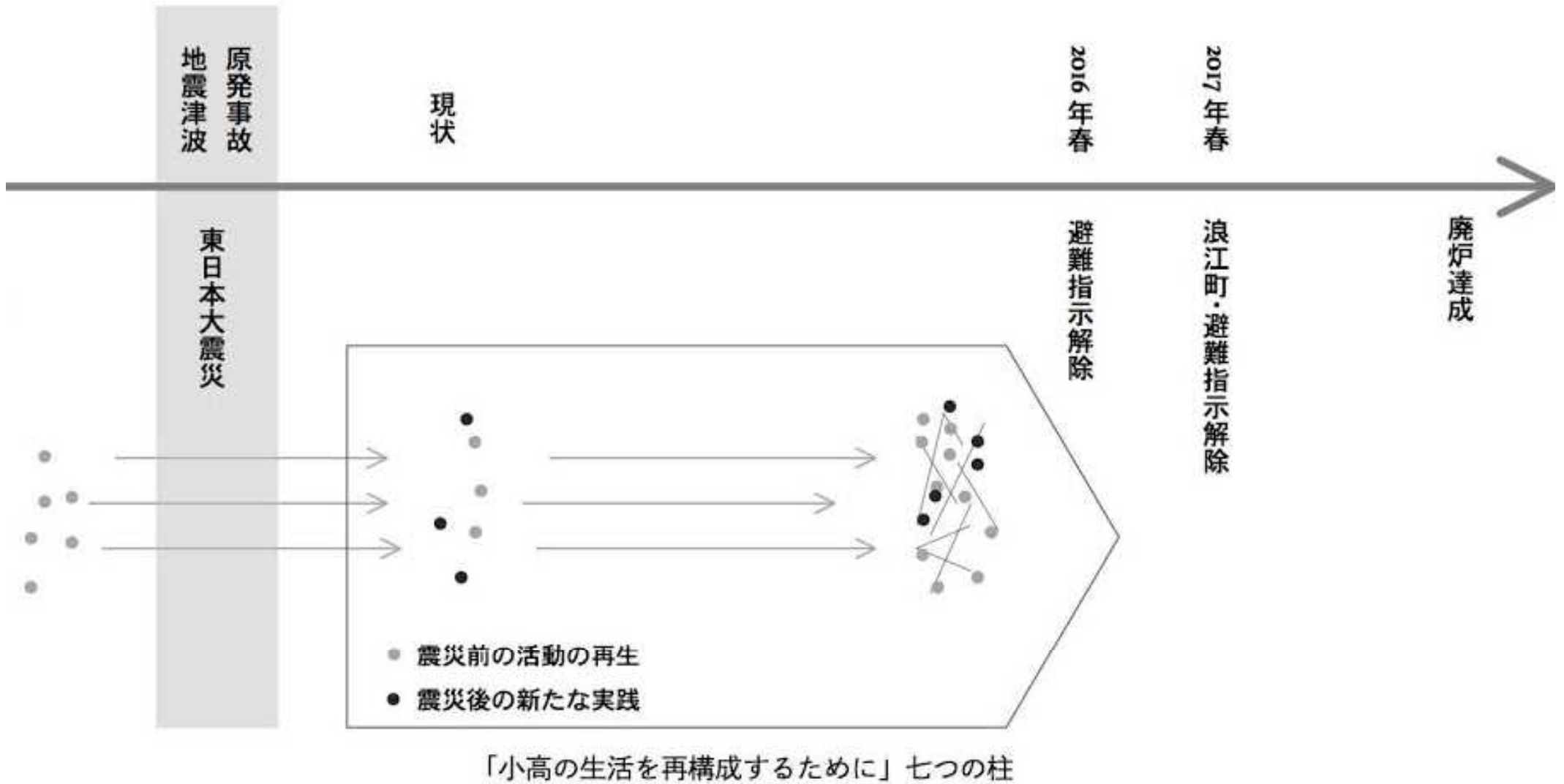
風評被害や若手家族ならではの子育て問題。

飼料づくりによって酪農に関わりたい人がいる。

小高の歴史をどう理解するか？

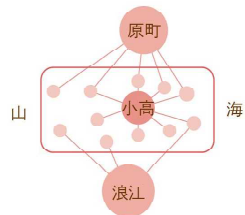


小高の歴史をどう理解するか？



小高の地域構想 (作成中)

多様な在から成る



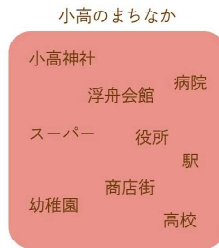
小高は東西約10kmと細長く、高低差が500mほどあり、海辺から阿武隈高地の扇状地まで多様な集落がある。小高のまちなかや原町や浪江との繋がりの中で、それぞれの行政区に自治の仕組みと文化があった。

これまでの蓄積を活かす



小高神社、相馬絹業会館などの建造物、酪農研究会などの自主組織、養蚕、機織の記憶が、過去の蓄積としてある。これらは小高らしさの要素であり、小高再出発の原動力となる。

まちなかが小高の支柱となる



小高のまちなかとの関係の深さは、在によって違っていたが、在を支えていたのだろう。復帰後、小高の中心としての役割がきつとあるのだろう。

新たな生業に挑戦する

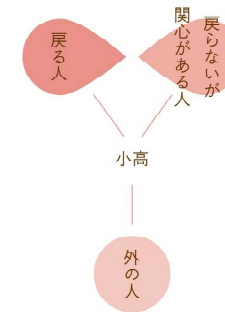
単一の産業で発展してきた街ではなかった。農業、漁業、絹業、流通、工業…。厳しい状況を乗り越える際には、新たな産業、乗り越えるための知恵があった。

活動が芽生える



各所で様々な活動が展開されている。人が集う場や情報を共有する場ができ、再開した店や事業所がある。漁業や酪農を再開しようと考えている人もいる。小高の将来像は、そうした活動の先にある。

人と小高の、いろいろな繋がりをもつ



戻る人がいる一方で、みんなが小高にすぐに帰るわけではない。また、今までよりも外部の人との接点が増えている。戻らないが関心がある人、外の人と、まちの関係性を育みたい。未成年世代との丁寧な対話も必要。

原発災害、放射線リスクに向き合う

ゼロにはならない放射線リスクと、どう向き合うべきだろうか。様々な向き合い方があるだろうが、それらを可能にする、支えるものが必要だろうか。

災害や避難生活を如何に改善できるか？

- 災害からの避難
- 短期避難生活
- 長期避難生活
- 帰還準備（2016.4予定）
- 帰還直後

原発被災とは何か？

- 特に子供のいる世代への影響
- 家族内、自治体間の分断
- 超長期、見えない、などの初めての状況
- 専門家、技術への不信

復興のメカニズムとは何か？

- 新たな地域産業の創出

- ①個別事業所が再開する

- ②個別事業主が、被災前の地域産業に対して改善点を見出す

- ③個別事業主が、地域産業の復興も検討する

- ④個別事業主が、地域産業の復興のために行動を起こす

- ⑤多様な主体が、地域産業の復興のために、協働する

- ⑥被災前とは異なる地域産業が営まれる

地域構想

- 多様な単位を重ね合わせる
南相馬市、小高区、行政区：狭い方向
福島県、相双郡：広い方向
- 主体的に介入する、責任もとる。その
ような暮らしの単位としての地域の空
間と制度がデザインの対象